

# 大学生の学習行動に及ぼす就職意識の影響

西本佳代

(2008年10月2日受理)

## The Influences of University Student's Ideas about Being Employed upon Their Behaviors of Learning

Kayo Nishimoto

**Abstract:** In recent years, the learning-supports for university students like “First Year Experience” gains ground. However, students' behaviors of learning have not been examined well. To advance learning-support systems the behaviors have to be clarified in more detail. Therefore, in this paper, students' behaviors of learning will be discussed by the survey to them, and how students' ideas for their future work influence upon their behaviors of learning will be examined. The result of factor analysis shows that students' behaviors of learning are composed by three factors; “Laziness”, “Class Oriented” and “Earnest”. “Laziness” is a type of students who neglects classes. “Class Oriented” is a type of students who have positive ideas for classes. “Earnest” is a type of students who study seriously. These three factors are influenced by their ideas for future work; “Class Oriented” and “Earnest” have clear vision for their future jobs. On the other hand, “Laziness” doesn't have clear vision for their future jobs after their graduates. As a result, whether students have visions about future jobs or not, effects their activities for the studies in their university life.

Key words: university students, behaviors of learning, ideas about being employed

キーワード：大学生, 学習行動, 就職意識

## 1. はじめに

本研究の目的は、大学生の就職意識が、彼らの学習行動にどのような影響を与えているのか明らかにすることである。近年、大学における学習支援の高まりが著しい。初年次教育や補習教育を実施する大学は増加し、その取り組み自体も当然視されつつある。大学の役割として、学生に対する学習支援が必要であるという考えが定着してきたといえるだろう。

しかし、学習支援の必要性が認められる一方、支援の対象となる大学生の学習行動について、これまで十分に分析されてこなかった。例えば、近年、大学生の「まじめ」化が指摘される。武内によれば、最近の大学生は「勉強志向」や「まじめ」化傾向を強めているという（武内編 2003, 2005など）。だが、こうした真

面目さが、いかに規定されているかという点については十分に踏み込んだ分析がなされていないのである。

学習の取り組み方や、学習に対する考え方といった学習行動は、一体何によって規定されているのだろうか。これらに影響を与える要因としては、サークルやアルバイト、友人関係など様々なものが考えられる。しかし、本研究では、それらの中でも、まず、特に学習行動に大きな影響を与えていると考えられる就職意識に焦点を絞る。

今や大学は、「教育の最終段階として、社会と学校を繋ぎ合わせる」役割を持つと認識されている（山田 2007, 22頁）。卒業後の就職は、大学生にとって大きな関心事であり、大学生活は、就職するための準備期間として大きく既定されているのである。

就職と大学の学習との関係については、これまでも、

数多くの研究が蓄積されてきた。それらの多くは、大学在学時の学習が就職やその後の出世に与える効果を分析したものや、就職活動中の学生や就職後の卒業生の大学教育へ対する評価を明らかにするものである。

まず、大学在学時の学習の効果を分析した研究からみてみよう。荻谷ら（2006）では、12大学の四年生に質問紙調査を実施し、大学成績がよかった者は、大企業に内定する確率が高かったという結果を示している<sup>1)</sup>。また、松繁編（2004）では、大学時代の教育が初職の獲得にプラスの効果を与え、役員への昇進に大学での成績が正の効果を持つことが明らかにされている。

他方、就職活動中の学生の大学教育に対する評価を明らかにした研究としては、安田（1999）が挙げられる。彼女は、都内私立大学の四年生にアンケート調査を実施し、就職活動後、男子学生は授業の成績が役に立たなかったと評価していることを明らかにした。また、小方（1998）は、卒業生を対象にした調査から、在学中の勉強に対する満足度がきわめて低いこと、そして、その背景として、将来の職業ビジョンの曖昧さという学習者サイドの問題と共に、職場での知識・技能要求と大学教育が乖離していることを指摘した。

このように、大学生の学習と就職との関連は、これまでも様々な方面から明らかにされている。しかし、それらは、大学在学時の学習が就職やその後の出世に与える効果を分析したものや、就職活動中の学生や就職後の卒業生による大学教育の評価を明らかにするものである。これまで、在学生の就職意識と学習行動との関連は、十分に分析されてこなかったといえよう。

そうした中、在学生の学習行動と就職意識とを結びつけて分析した研究として山田（2007）が挙げられる。山田（2007）は、中国地方の国公立大学の学生を対象としたアンケート調査を行い、企業が採用を決定する際に資格や大学での成績を重視すると考える大学生が多いこと、就職後に出世する学生のタイプとして資格取得や大学の勉強に熱心なタイプを想定する学生が多いことなどを指摘した。これらの結果から、山田

（2007）は、「大学の授業で職業に役立つ知識と技術を学び、その過程で資格を取得することで、就職活動、ひいては就職後のキャリアを有利に進めることが可能になる」（22頁）という考えが流布することが、現在の学生の「まじめ」な学習行動に影響を与えていると説明する。

確かに、こうした指摘は、大学生の学習行動と就職意識との関係を明らかにする上で有用である。しかし、山田（2007）では、学生が一枚岩として捉えられがちである。そこでは、大学生にも様々なタイプがあるということが十分に考慮されていない。

だが、大学生の多様性は考慮されて然るべきだろう。有効な学習支援を実施する場合、個々の学生の姿ができるだけ想定しなければならないからである。そこで、本研究では、大学生の多様な学習行動に着目し、まず、それらがどのようなタイプに分けられるのかを検討する。その上で、就職意識が、彼らの学習行動にどのような影響を与えているのか明らかにする。

## 2. 研究の枠組み

本研究で分析に用いたのは、2002年に四国A県の大学の学生を対象に行ったアンケート調査の結果である。表1は、調査対象者の簡単な属性を示したものである。

分析対象としたのは、A県の国立大学1校と私立大学3校の学生である。国立A大学では、教職課程や教養科目などの授業を利用し、605名から回答を得た。私立B大学は、1年生と3年生を対象とし、全学において調査を実施した。その結果、両学年のほとんどである1,300名の回答を得ることができた。また、私立C大学は75名、私立D大学短大部は55名の回答を得た。

なお、本研究で分析した調査結果は、すでに、藤井泰・山田浩之編『地方都市における学生文化の形成過程』（松山大学地域研究センター叢書 第3巻）2005年、において分析されている。本研究では、同様のデータを用いて再分析を行った。

表1 調査対象者の属性

	国立A大学	私立B大学	私立C大学	私立D大学	計
男	44.8	50.0	0.0	0.0	45.2
女	55.2	50.0	100.0	100.0	54.8
計	100.0(605)	100.0(1299)	100.0(75)	100.0(55)	100.0(2034)
1年生	63.9	46.5	0.0	96.3	51.3
2年生	28.4	2.4	0.0	3.7	10.1
3年生	5.8	50.3	72.0	0.0	36.5
4年生以上	2.0	0.8	28.0	0.0	2.2
計	100.0(606)	100.0(1299)	100.0(75)	100.0(54)	100.0(2034)

### 3. 分析

#### 3.1 大学生の学習行動

まず、現在の大学生は、大学での学習に対してどのような考えを持ち、どのように行動しているのだろうか、彼らの学習行動についてみてみよう。表2は、大学生の学習に対する考えを明らかにすることを目的として作成された20の質問と回答である。

これらの質問項目に対する答えからは、大学生の学習行動が多様な特徴をもっていることがうかがえる。まず、特徴として挙げられるのは、授業に対する積極性である。例えば、「授業はできるだけ休まないようにしている」に「とてもあてはまる」と答えている者は、43.9%で、「少しあてはまる」をあわせると74.4%にのぼる。また同様に、「大学の授業では専門的知識を得られると思う」は67.6%、「きちんとノートを取りながら授業を聞いている」は64.8%、「成績はできるだけA（優）を取ろうとしている」は61.8%の学生が肯定的な意見を示している。これらの結果からは、大学の授業に対して肯定的な評価をし、積極的に授業に臨んでいる学生の姿がうかがうことができる。

しかしながら、大学生の受講態度は積極的とばかりはいえないようである。「授業の内容について質問することがある」に「全くあてはまらない」と答えた者は34.2%で、「あまりあてはまらない」の31.1%とあわせると、6割を超えていた。また、「ゼミや研究室の

授業ではよく質問する」では「全くあてはまらない」が25.2%、「あまりあてはまらない」が28.9%となっていた。ここから、授業に参加しているものの、必ずしも積極的に行動していないことがわかる。

さらに、他の項目をみてみると、授業中に授業と関係ないこととする学生が多いこともわかる。「授業中、他のことを考えていることが多い」に「とてもあてはまる」と答えた者は12.7%、「少しあてはまる」は45.4%となっている。また、「授業中に携帯電話でメールの読み書きをする」は、「とてもあてはまる」が13.2%、「少しあてはまる」が42.9%であり、さらには「授業中によく居眠りをする」では、「とてもあてはまる」が10.0%、「少しあてはまる」が34.0%となっている。これら授業に対しての消極的な行動を聞く項目について、「とてもあてはまる」と答える者の数はそれほど多くないものの、「少しあてはまる」と答える者は多い。ここから、授業に参加してはいるが、必ずしも集中していない学生の姿がみえてくる。

これらの結果をまとめると、現在の大学生の学習行動に様々な特徴があることがうかがえる。そこで次に、大学生の学習行動に関する意識の構造を検討しよう。

表3は、大学生の学習行動に関する質問項目を用い、因子分析をおこなった結果を示したものである。ここから、3つの因子が抽出された<sup>2)</sup>。

第一因子は、「授業中、授業に関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い」や「授業中

表2 大学生の学習行動

	とてもあてはまる	少しあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
授業はできるだけ休まないようにしている	43.9	30.5	13.0	10.5	2.0
楽しんでいる授業がある	19.7	29.4	24.9	16.5	9.5
授業の内容について質問することがある	2.7	12.6	19.5	31.1	34.2
授業中に私語することが多い	3.5	23.0	31.1	26.8	15.6
きちんとノートを取りながら授業を聞いている	25.5	39.3	22.3	10.0	3.1
授業中、他のことを考えていることが多い	12.7	45.4	31.1	9.9	0.9
授業中、授業と関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い	4.1	24.0	29.3	27.6	15.0
授業中によく居眠りをする	10.0	34.0	25.3	19.6	11.1
卒業に必要な授業は履修しないようにしている	6.9	15.6	34.3	29.4	13.8
成績はできるだけA（優）を取ろうとしている	27.8	34.0	22.3	11.4	4.5
授業中に携帯電話でメールの読み書きをする	13.2	42.9	18.6	14.8	10.5
授業に出席することを苦痛に感じることが多い	11.2	29.7	30.2	20.6	8.3
ゼミや研究室の行事には必ず出席する	20.7	22.6	31.6	14.1	11.0
ゼミや研究室の授業ではよく質問する	3.5	8.1	34.2	28.9	25.2
大学の授業で幅広い知識を得られると思う	15.7	35.9	30.4	13.9	4.1
大学の授業では専門的知識を得られると思う	24.6	43.0	21.7	8.6	2.1
授業で考え方が変化したことがある	15.2	34.9	32.0	12.6	5.3
大学の授業は役に立たないと思う	2.7	13.1	37.1	33.4	13.7
成績を見て納得できないことが多い	5.6	19.9	38.6	27.5	8.4
自分の成績は良い方だと思う	3.8	19.4	42.3	22.1	12.5

に携帯電話でメールの読み書きをする」など、授業に集中していないことを示す項目から構成されている。そのため、【さぼり志向】と命名した。第二因子には、「大学の授業では幅広い知識を得られると思う」「大学の授業では専門的知識を得られると思う」など、授業を肯定的に評価する項目が含まれている。そのため、【授業肯定】と命名した。また、第三因子は、「成績はできるだけA（優）を取ろうとしている」「授業はできるだけ休まないようにしている」など授業に対してまじめに取り組む項目から構成されている。そのため、【まじめ志向】と命名した。

### 3.2 学習行動と就職に関する考えとの関係

以下では、先の因子分析で得られた三つの因子について、それらが、大学生の就職意識とどのような関係にあるのかを分析する。

まず、大学生の就職に関する考えとの関係をみてみよう。表4は、就職意識を示す項目ごとに分散分析を行い、平均値の差を検定した結果を示したものである。

これらの結果から、大学生の就職に関する考えは、因子ごとに異なっていることが明らかになった。まず、【さぼり志向】からみてみよう。【さぼり志向】は、「就職しても機会があれば退職、転職したい」「就職後は仕事よりも私生活を大切にしたい」「すでに就職したい企業や職種がある」「自分の専攻領域を生かせる職種に就職したい」「大学での勉強は就職に役立つと思

う」などの項目で有意となっていた。つまり、【さぼり志向】は、就職したい職種が決まっておらず、就職において大学での勉強の有用性を感じていない。また、就職に際して自分の専攻領域にこだわりがなく退職・転職もいとわないと考えている。

ここから、次のことがいえるだろう。【さぼり志向】は、就職において職種、専攻領域においてこだわりがない。そのため、大学での勉強を就職との関連で位置づけることができず、その有用性を見出すことができないのである。

他方、【授業肯定】については、「すでに就職したい企業や職種がある」「自分の専攻領域を生かせる職種に就職したい」「大学での勉強は就職に役立つと思う」「仕事が自分にあわなければすぐに転職したい」などの項目で有意となっていた。具体的には、【授業肯定】は、就職したい職種が決まっており、就職において大学での勉強の有用性を感じている。また、就職に際して自分の専攻領域にこだわりがあり、退職・転職に否定的である。

一方、【まじめ志向】は、「すでに就職したい企業や職種がある」「就職後は転勤せずに同じ地域にとどまりたい」「フリーターになると将来性を失うと思う」「自分の専攻領域を生かせる職種に就職したい」「大学での勉強は就職に役立つと思う」「就職しても機会があれば退職、転職したい」で有意となっていた。つまり、

表3 学習行動に関する質問項目の因子構造

	因子					
	1	2	3	4	5	6
授業中、授業に関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い	<b>0.708</b>	-0.072	0.006	0.117	0.004	-0.103
授業中に携帯電話でメールの読み書きをする	<b>0.620</b>	0.099	0.082	-0.126	0.052	0.014
授業中、他のことを考えていることが多い	<b>0.557</b>	-0.004	0.000	-0.028	-0.087	0.071
授業中に私語をすることが多い	<b>0.556</b>	-0.021	0.104	-0.049	0.055	-0.080
授業中によく居眠りをする	<b>0.519</b>	0.073	-0.084	0.073	-0.093	-0.010
大学の授業では幅広い知識を得られると思う	0.010	<b>0.798</b>	-0.008	-0.040	0.063	0.042
大学の授業では専門的知識を得られると思う	0.061	<b>0.709</b>	0.042	0.016	-0.027	-0.011
大学の授業は役に立たないと思う	0.021	<b>-0.523</b>	0.044	0.071	-0.028	0.316
授業で考え方が変化したことがある	-0.015	<b>0.517</b>	-0.038	0.273	0.004	0.198
成績はできるだけA（優）を取ろうとしている	0.086	0.027	<b>0.730</b>	0.020	0.028	0.066
自分の成績は良い方だと思う	0.179	-0.059	<b>0.645</b>	0.075	0.050	-0.050
授業はできるだけ休まないようにしている	-0.110	0.015	<b>0.617</b>	0.020	-0.088	0.010
きちんとノートを取りながら授業を聞いている	-0.225	0.017	<b>0.493</b>	-0.005	0.020	0.050
授業の内容について質問することがある	-0.012	-0.047	0.081	0.677	0.035	0.043
楽しみにしている授業がある	-0.008	0.152	0.037	0.609	-0.126	-0.005
卒業に必要な授業は履修しないようにしている	0.094	-0.058	-0.003	-0.135	0.053	0.130
ゼミや研究室の行事には必ず出席する	-0.053	0.077	0.073	-0.224	0.677	0.035
ゼミや研究室の授業ではよく質問する	0.032	-0.046	-0.083	0.331	0.667	-0.006
成績を見て納得できないことが多い	-0.077	0.027	0.046	0.055	0.027	0.540
授業に出席することを苦痛に感じるが多い	0.232	-0.022	-0.123	-0.162	-0.004	0.323
回転後の負荷量平方和	2.667	2.621	2.577	2.454	1.178	1.452

表4 就職に関する考え方による因子得点の平均値の差

	さぼり				授業肯定				まじめ			
	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない		あてはまる	どちらでもない	あてはまらない		あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	
大学入学前から就職したい業種や職種を決めていた	-0.062	-0.006	0.067	*	0.169	-0.136	-0.121	***	0.144	-0.014	-0.136	***
すでに就職したい企業や職種がある	-0.083	0.065	0.083	***	0.147	-0.100	-0.146	***	0.126	-0.054	-0.136	***
就職先は職種よりも安定性で決める	0.018	0.037	-0.052		0.028	-0.047	0.015		0.087	0.018	-0.115	***
就職後は転勤せず同じ地域にとどまりたい	-0.019	0.045	0.011		0.030	-0.067	-0.011		0.056	-0.013	-0.148	***
就職しても機会があれば退職、転職したい	0.125	0.042	-0.135	***	-0.067	-0.043	0.090	**	-0.093	-0.046	0.117	***
仕事が自分にあわなければすぐに転職したい	0.174	-0.031	-0.102	***	-0.093	-0.026	0.102	***	-0.141	0.044	0.062	***
卒業後、すぐに就職する必要はない	0.081	0.049	-0.032		0.014	-0.124	0.032	*	-0.132	-0.089	0.060	***
仕事のやりがいよりも給料の高さを重視する	0.189	0.067	-0.115	***	-0.137	-0.118	0.143	***	-0.097	-0.039	0.063	**
フリーターになると将来性を失うと思う	0.005	-0.060	0.058		-0.002	0.002	-0.001		0.061	-0.007	-0.130	***
就職後は仕事よりも私生活を大切にしたい	0.114	-0.037	-0.095	***	-0.018	-0.021	0.082		-0.022	0.016	-0.015	
就職後、職場に适应できるかどうか不安である	-0.008	0.033	0.013		0.030	-0.172	0.043	***	0.044	-0.126	-0.095	**
就職についてはまったく考えていない	0.288	0.128	-0.083	***	-0.224	-0.219	0.101	***	-0.284	-0.207	0.106	***
自分の専攻領域を生かせる職種に就職したい	-0.074	0.121	0.191	***	0.150	-0.255	-0.329	***	0.151	-0.254	-0.356	***
大学での勉強は就職に役立つと思う	-0.206	0.088	0.328	***	0.438	-0.222	-0.625	***	0.265	-0.149	-0.364	***
女性は結婚後や出産後は退職した方がよいと思う	0.080	0.084	-0.057	**	-0.056	-0.112	0.070	***	-0.083	-0.063	0.049	*

注：\*\*\*はP<0.001、\*\*はP<0.01、\*はP<0.05。以下、同様に表記。

【まじめ志向】は、就職したい職種が決まっており、就職において大学での勉強の有用性を感じている。また、就職に際して自分の専攻領域にこだわりがあり、退職・転職に否定的である。さらには、フリーターに否定的な考えを持ち、就職後の転勤を嫌がっている。

これら【授業肯定】と【まじめ志向】の結果からは、それらが同様の特徴をもっていることがわかる。具体的には、就職したい職種が決まっており、就職において大学での勉強の有用性を感じていること、また、就職に際して自分の専攻領域にこだわりがあり、退職・転職に否定的なことである。

ここから次のことが指摘できる。【授業肯定】と【まじめ志向】は、専攻領域を生かした、希望する職種がある。そのため、就職との関連で大学での勉強を位置づけることができ、その有用性を感じる。また、職へのこだわりがあるため、退職・転職に否定的である。

なお、これらの特徴は、先にみた【さぼり志向】の特徴と対極にある。そのため、これらの特徴は、大学

生の学習行動が肯定的か否かを決める際に、大きな影響を与えていると考えられる。

他方、【授業肯定】と【まじめ志向】で異なっている結果にも着目しよう。先の結果からは、【まじめ志向】だけ、フリーターに否定的な考えを持ち、就職後の転勤を嫌がるという特徴があることも明らかになった。ここから、【まじめ志向】は、【授業肯定】と類似の考えを持ちながらも、より安定性を求め、保守的な思考をするといえるだろう。

以上をまとめると、大学生の就職に関する考えについて次の三点を指摘できる。第一に、【さぼり志向】は、就職において職種、専攻領域においてこだわりがない。そのため、大学での勉強を就職との関連で位置づけることができず、その有用性を見出すことができない。第二に、その反対に、【授業肯定】と【まじめ志向】は、専攻領域を生かした、希望する職種がある。そのため、就職との関連で大学での勉強を位置づけることができ、その有用性を感じている。第三に、【まじめ



表5 就職する際に重視する条件による因子得点の平均値の差

	さぼり			授業肯定			まじめ		
	重視する	重視しない		重視する	重視しない		重視する	重視しない	
給料	0.052	-0.11	***	-0.035	0.076	*	0.002	-0.005	
休日の多さ	0.162	-0.097	***	-0.127	0.076	***	-0.099	0.06	***
残業の少なさ	0.125	-0.022	**	-0.165	0.03	***	-0.023	0.004	
仕事のやりがい	0.003	-0.011		0.034	-0.131	**	0.024	-0.092	*
勤務地	0.021	-0.021		-0.006	0.007		0.048	-0.048	*
転勤の有無	0.037	-0.01		-0.05	0.014		0.037	-0.01	
福利厚生	-0.127	0.025	**	0.108	-0.02	*	0.156	-0.03	***
安定性	-0.012	0.02		0.011	-0.018		0.068	-0.117	***
結婚後や出産後も働けること	-0.075	0.026	*	0.107	-0.036	**	0.202	-0.068	***

志向】は、【授業肯定】に比べ、就職に対して、より安定性を求め、保守的な思考をもっている。

### 3.3 学習行動と就職する際の希望条件との関係

先にみた、就職に関する考えは、因子ごとに特徴を持つことがわかった。それらの特徴の違いをさらに明確にするために、次に学習行動と就職する際の希望条件との関係のみてみよう。表5は、大学生が就職する際に重視する条件ごとに分散分析を行い、平均値の差を検定した結果を示したものである。

これらの結果からは、大学生が就職する際に重視する条件が、因子ごとに大きく異なっていることがわかった。まず、【さぼり志向】からみてみよう。【さぼり志向】は、「給料」「休日の多さ」「残業の少なさ」「福利厚生」で有意になっている。すなわち、【さぼり志向】は、就職に際して、それらの項目を重視している。ここから、【さぼり志向】は、就職する際に、給料や仕事量の少なさといった待遇を重視するといえる。

【授業肯定】は、「仕事のやりがい」「結婚後や出産後も働けること」「休日の多さ」「残業の少なさ」で有意になっている。具体的には、仕事のやりがいや結婚・出産後に働けることを重視し、休日の多さや残業の少なさは重視しない。ここから、【授業肯定】は、仕事を中心に人生設計をしていることがうかがえる。

他方、【まじめ志向】は、「福利厚生」「安定性」「結婚後や出産後も働けること」「休日の多さ」で有意になっている。具体的には、就職に際して、福利厚生や安定性、結婚・出産後に働けることを重視し、休日の多さは重視していないのである。この結果から、【まじめ志向】は、三つのタイプの中で、最も就職において、堅実さを重視しているといえるだろう。

以上をまとめると、次の三点が指摘できる。第一に、【さぼり志向】は、就職する際に、給料や仕事量の少なさといった待遇を重視する。第二に、【授業肯定】は、仕事量の少なさよりもやりがいや結婚・出産後に働

ることを重視する。第三に、【まじめ志向】は、就職において堅実さを重視する。

### 3.4 学習行動と予想採用条件との関係

先に、学生が就職に際して求める条件が、因子ごとに大きく異なっていることをみてきた。では、逆に、就職に際して学生は何を求められていると考えているのだろうか。ここでは、企業が採用を決定する際に大きな影響を与えると学生が考える項目についてみてみよう。表6は、企業が採用の際に重視すると考えられる項目ごとに分散分析を行い、平均値の差を検定した結果を示したものである。

これらの結果からは、企業が採用を決定する際に重視すると考えられる項目は、【さぼり志向】と【授業肯定】【まじめ志向】との間で相違があることが明らかになった。まず、【さぼり志向】からみてみよう。

【さぼり志向】は、「大学の名前」「コネ」「人格」で有意になっている。つまり、【さぼり志向】は、企業が採用の際に、大学の名前とコネを重視し、人格は重視されないと考えているのである。この結果から、【さぼり志向】は、企業の採用において、大学の名前やコネといった現在の自分の努力では変えにくいものが重視されると考えているといえる。

一方【授業肯定】は、「大学での成績」「人格」「大学の名前」「コネ」で有意になっている。つまり、【授業肯定】は、企業が採用の際に、大学での成績と人格を重視し、大学の名前やコネは重視されないと考えているのである。

この【授業肯定】の結果は、【まじめ志向】の結果と類似している。【まじめ志向】は、「大学での成績」「人格」「コネ」で有意、すなわち、大学の成績と人格が重視され、コネは重視されないと考えている。【授業肯定】が「大学の名前」を重視しているという違いはあるものの、それ以外については、【授業肯定】と【まじめ志向】は、採用の際に企業が同様の項目を重視、

表6 企業が採用の際に重視すると考えられる条件による因子得点の平均値の差

	さぼり			授業肯定			まじめ		
	重視する	重視しない		重視する	重視しない	*	重視する	重視しない	
資格	-0.004	0.017		0.023	-0.101	*	0.004	-0.018	
学歴	-0.006	0.006		0.005	-0.004		0.026	-0.028	
大学の名前	0.086	-0.043	**	-0.080	0.040	**	-0.048	0.024	
大学での成績	-0.024	0.029		0.059	-0.070	**	0.070	-0.083	***
性別	0.024	-0.003		0.014	-0.003		0.055	-0.011	
容姿	0.042	-0.009		0.008	-0.001		0.002	0.000	
サークル活動	0.025	-0.005		-0.015	0.003		-0.017	0.004	
人格	-0.030	0.088	**	0.055	-0.159	***	0.036	-0.105	**
コネ	0.132	-0.074	***	-0.127	0.071	***	-0.094	0.053	***

もしくは重視しないと考えていた。具体的には、【授業肯定】と【まじめ志向】は、大学での成績や人格という、現在の努力で変化可能なものが企業の採用において重視されると考えているのである。

以上、学習行動と予想採用条件との関係についてみてきた。ここから次の二点が指摘できる。第一に、【さぼり志向】は、企業の採用において、大学の名前やコネといった現在の自分の努力では変えにくいものが重視されると考えている。第二に、【授業肯定】と【まじめ志向】は、大学での成績や人格という、現在の努力で変化可能なものが企業の採用において重視されると考えている。

では、就職した後についての考えは因子ごとに異なっているのだろうか。最後に、出世すると予想される学生のタイプと学習行動との関係について見てみよう。

### 3.5 学習行動と出世する学生の予想タイプとの関係

企業に入ったら出世すると予想される学生のタイプを聞いた後、その解答をもとに分散分析を行い、平均値の差を検定した。その結果からは、因子ごとに、出世すると予想するタイプの学生が異なることが明らかになった。

【さぼり志向】は、「読書に熱心」「大学の勉強に熱心」で有意になった。すなわち、【さぼり志向】は、読書や大学の勉強に熱心な学生は出世しないと考えている。ここから、【さぼり志向】は、出世において大学の勉強の価値を見出していないこと、また、読書という教養的な要素が出世に影響しないと考えていることがわかる。

一方、【授業肯定】は、「文系サークルに熱心」「趣味に熱心」「大学の勉強に熱心」で有意であった。つまり、文系サークルや趣味、大学の勉強に熱心な学生が出世すると考えている。ここから【授業肯定】は、出世において大学の勉強の価値を見出していること、また、趣味といった得意な分野を持つことが出世に積

極的な影響を持つと考えていることがわかる。

他方、【まじめ志向】は「友人との交際に熱心」「資格取得に熱心」「大学の勉強に熱心」で有意であった。具体的には、友人との交際や資格取得、大学の勉強に熱心な学生が出世すると考えている。ここから、【まじめ志向】は、出世において大学の勉強や資格の価値を見出していること、また、友人との交際という対人関係能力に重きを置いていることがわかる。

以上の結果から、企業に入ったら出世すると予想される学生のタイプと学習行動との関連について次の二点が指摘できる。第一に、【さぼり志向】が出世において大学の勉強の価値を見出していないのに対し、【授業肯定】【まじめ志向】は大学の勉強の価値を見出している。第二に、【授業肯定】は趣味といった得意な分野を持つこと、【まじめ志向】は資格や対人関係能力がそれぞれ出世に有利だと考えている。

## 4. おわりに

以上、大学生の学習行動に及ぼす就職意識の影響について検討してきた。これまでの分析結果をまとめると次のようになる。

- ①大学生の学習行動を構成する因子として、【さぼり志向】、【授業肯定】、【まじめ志向】が抽出された。
- ②【さぼり志向】は、就職において職種、専攻領域においてこだわりがなく、大学での勉強の有用性を見出すことができない。その一方で、【授業肯定】と【まじめ志向】は、専攻領域を生かした、希望する職種があり、大学での勉強の有用性を感じている。
- ③企業の採用において、【さぼり志向】は大学の成績を重視しないのに対し、【授業肯定】と【まじめ志向】は、大学での成績が重視されると考える。
- ④出世において、【さぼり志向】が大学の勉強の価値を見出していないのに対し、【授業肯定】【まじめ志向】は大学の勉強の価値を見出している。

これらの結果から、大学生の学習行動との関係について考察しよう。【さぼり志向】を授業に消極的な学習のタイプ、【授業肯定】【まじめ志向】を授業に積極的な学生のタイプとして捉えれば、希望する職種の有無が、大学生の学習行動に大きく影響を与えていることがわかる。

希望する職種が決まっている学生は、現在大学で受講している授業を、将来就きたい職種と関連して位置づけることができる。そのため、大学の授業にも積極的に取り組む。一方、希望する職種が決まっていない学生は、現在大学で受講している授業の意味を、将来就きたい職業との関連で把握することができない。そのため、大学の授業に積極的に取り組むことができないと考えられる。

また、これらの大学生の学習行動の違いは、大学生が、希望する職種を自分の専攻領域と関連づけられるか否かにもかかっている。先に、授業を肯定的に評価する学生・授業をまじめに受ける学生は、希望する職種を自分の専攻領域と関連して選択しているため、就職の際に、専攻領域を生かせることを重視する傾向にあると指摘した。おそらく彼らは、専攻領域と関連して職種を選択しているため、専攻領域に関わって決定された授業に対して、就職に役立つと判断し、熱心に取り組むことができる。他方、就職したい職種が決まっていない、もしくは専攻領域と関係ない希望する職種を選んだ学生は、専攻領域に関わって決定された授業に対して、就職に役立つとは判断できず、熱心に取り組むことができないと考えられる。

以上から、自らの専攻領域と関連づけて就職したい職種を決めている大学生は、大学の授業に熱心に取り組む。他方、就職したい職種を決めていない、あるいは専攻領域と関連づけて就職したい職種を決めていない大学は、大学の授業に積極的に取り組むことができない傾向にあると考えられる。

最後に仮説的ではあるが、本研究で得られた知見から、学生支援の一環であるキャリア教育について考察したい。本研究の結果は、一見、近年重視されているキャリア教育の有効性を後押しするものとなっている。早期の進路決定は、その後の意欲的な学習につながると示しているからである。しかし、それは、単に、「将来の夢を早く決めなければいけない」という現在のキャリア教育のあり方が浸透した結果としてみるこ

ともできる。真面目な学生ほど、そのあり方を内面化して、早期に進路を決定、将来に向けて努力していると考えられるからである。だが、進路を迷うことや修正することが否定されがちな雰囲気の中で、彼らは適切な進路選択をしているのだろうか。また、未だに進路を決定できずにいる学生は、過剰なプレッシャーを感じていないかなど、そこで検討すべき問題は残されている。今後、それらに取り組み、さらに充実したキャリア教育、学生支援へとつなげていく必要があるだろう。それらの点については、今後の課題としたい。

## 【注】

- 1) 荻谷ら(2006)では、大学成績と内定との関係を指摘しているものの、同時に大学成績が他の代理変数になっていないかどうか吟味する必要があると補足している。
- 2) 因子の命名については、同様の質問項目を用いたアンケートを実施した葛城(2007)を参考にした。

## 【参考文献】

- 藤井泰・山田浩之編, 2005, 『地方都市における学生文化の形成過程』(松山大学地域研究センター叢書第3巻) 松山大学総合研究所。
- 荻谷剛彦・平沢和司・本田由紀・中村高康・小山治, 2006, 「大学から職業へⅢ その1」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第46巻, 43-74頁。
- 松繁寿和編著, 2004, 『大学教育効果の実証的分析』日本評論社。
- 小方直幸, 1998, 『大卒者の就職と初期キャリアに関する実証的研究』(博士論文シリーズ No.1), 広島大学大学院教育研究センター。
- 武内清編, 2003, 『キャンパスライフの今』玉川大学出版部。
- 武内清編, 2005, 『大学とキャンパスライフ』ぎょうせい。
- 山田浩之・葛城浩一編, 2007, 『現代大学生の学習行動』(高等教育研究叢書 90) 広島大学高等教育研究開発センター。
- 安田雪, 1999, 『大学生の就職活動』中央公論新社。  
(主任指導教員 山田浩之)